ISSN 2187-1841
千代田区立日比谷図書文化館

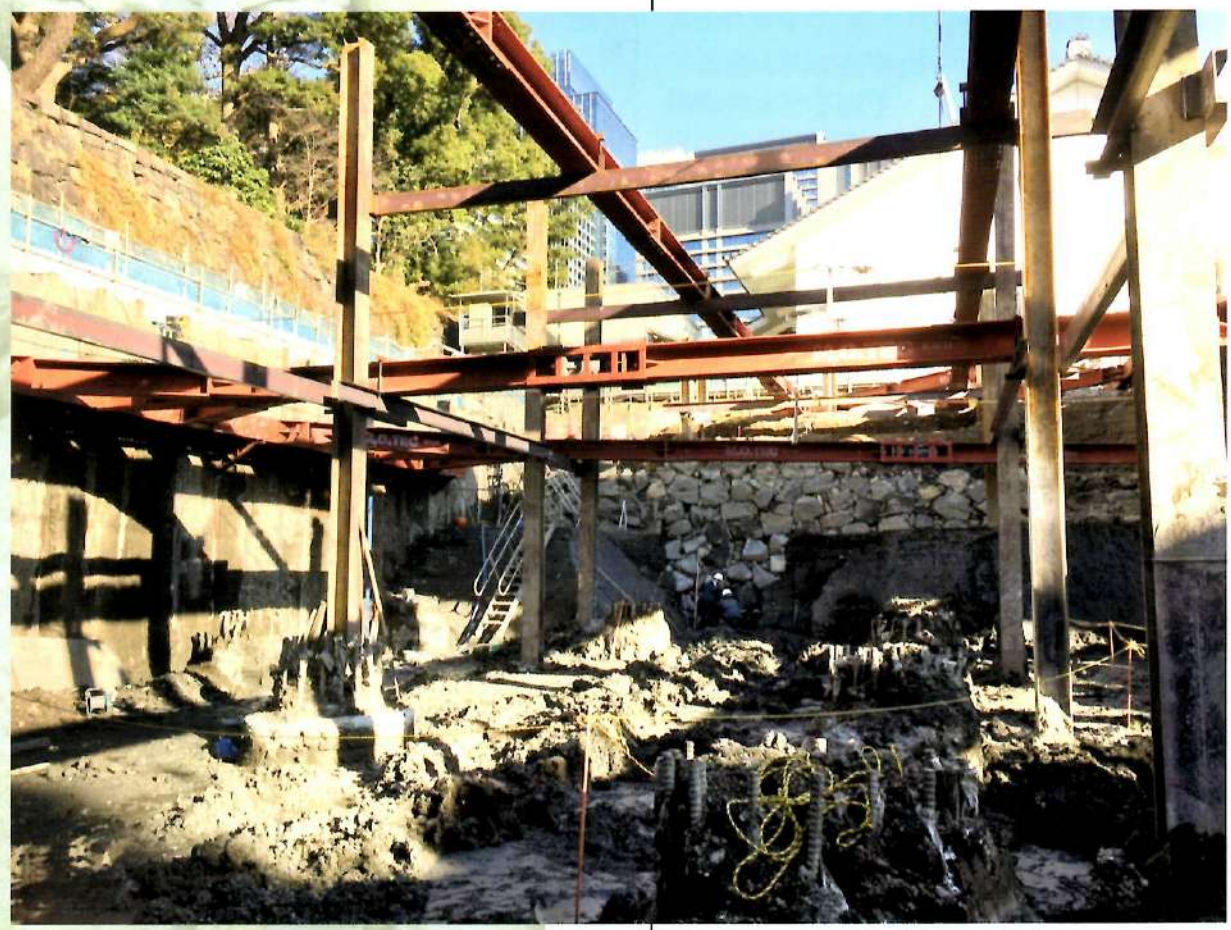
文化財ニュース

25 Autumn 2021

特集

江戸城初期の石垣を発掘調査しています！

現在、千代田区では宮内庁が実施している三の丸尚蔵館（しょうぞうかん）整備工事に伴って、江戸城内での発掘調査を行っています。この中で、新たな発見となった江戸城初期の石垣について、最新の調査成果を紹介します。



不時発見された石垣

今回新たな発見となった石垣（1号石垣遺構）は、江戸城の内、大手門を入ってすぐ北西側の位置で発見されました【図1】（P.2）。この地点では現在、三の丸尚蔵館整備工事が行われており、今回の発見もその工事に伴ったものでした。千代田区は、石垣が発見された令和2年（2020）11月28日から緊急で調査を行っています。現在は、現地での調査が終了し、整理・分析作業を行っている段階です。

なお、今回見つかった石垣は、工事に当たっている宮内庁などの協力で掘削が計画された範囲から外され、現地に保存されることになりました。地中に埋めて保存するため現地で見学することはできませんが、千代田区と宮内庁などで調査成果の公開についても検討を進めています。

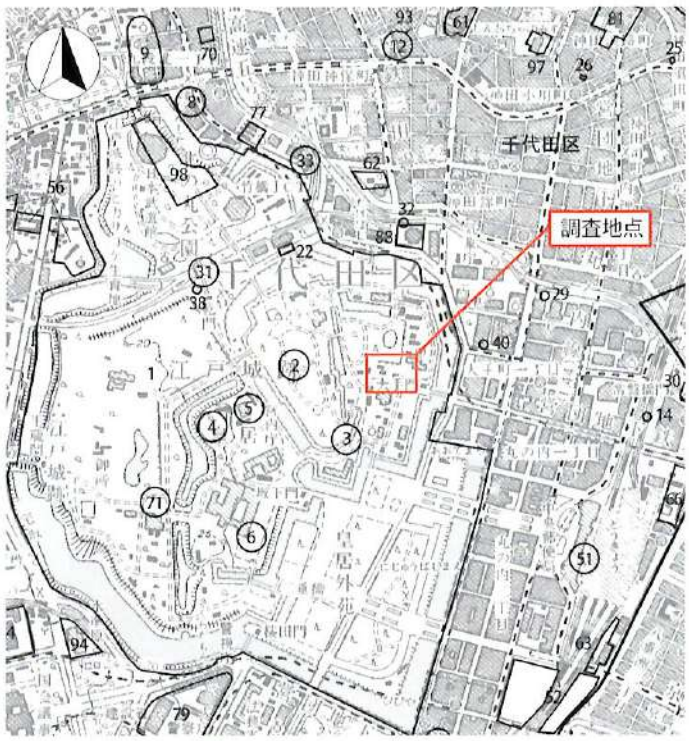
特集

江戸城初期の石垣を発掘調査しています！

地中に残されていた初期の堀

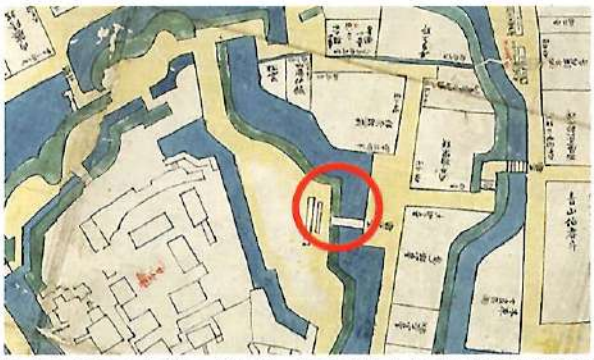
１号石垣遺構は、江戸城の東側の本丸と二の丸や三の丸が結びつく一帯で発見されました。この地点は、現在行われている三の丸尚蔵館整備工事の実施以前には皇居東御苑の見学者のための休憩所や売店が並んでいた一帯ですが、古写真などから、かつては水を張った堀が東西方向に走っていたところを埋め立てたことがわかっています。このため、三の丸尚蔵館整備工事は地中に残るかつての堀を壊さないように設計して進められていました。

ところが、当初想定していた東西方向の堀よりもさらに下層に、南北方向を主軸とする別の石垣が残されていた事が今回明らかになりました。発見された１号石垣遺構は南北約 16m、高さ約 4m で、上端や南北の両端が壊された状態で発見されました。遺構の上部には、東西方向の堀が走っていた時代の堀底の土がかぶさっていることから、堀が東西方向になる以前の堀の一部と考えられます。遺構の前後には石垣を築いた際のものと見られる掘り方（土を掘り込んだ跡）が残っており、そこから 16 世紀第三四半期頃に作られたものと見られる瀬戸産の擂鉢の一部【写真１】が出土したほか、遺構の西側でも同様の掘り方から中国景徳鎮産の磁器片や北宋銭【写真２】などが出土しました。

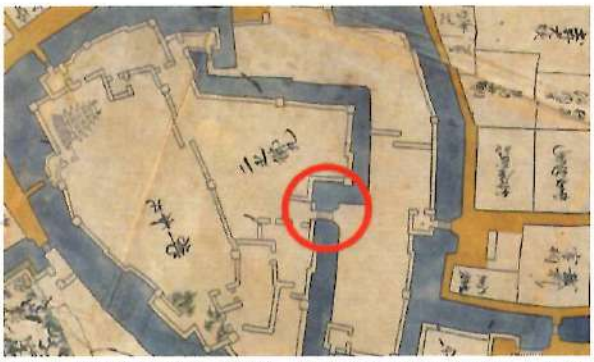


【図１】調査地点の位置（図中番号は遺跡番号）

この地点を古地図で調べてみると、17 世紀初めのある時期までの絵図ではこの地点の堀が南北方向に描かれていることがわかります【図２】・【図３】。こうしたことから、今回出土した石垣遺構は江戸時代の初め頃に築かれ、20 ～ 30 年程度のごく短い期間の後に、堀の付け替えによって地中に埋められた石垣であると考えられます。

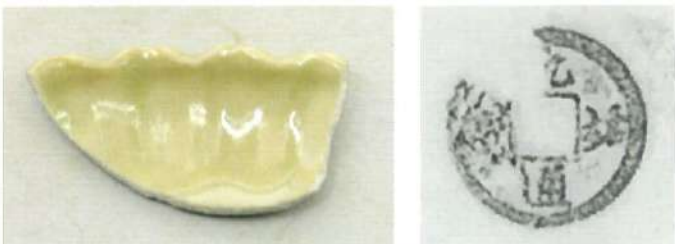


【図２】「慶長江戸絵図（部分）」（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）に描かれた濠（1610 年頃）



【図３】「寛永江戸全図（部分）」（臼杵市教育委員会所蔵）に描かれた濠　（1640 年頃）

【写真１】１号石垣遺構から出土した擂鉢



【写真２】西側石垣の掘り方から出土した景徳鎮産磁器片（左）・北宋銭の拓本（右）

【写真 3】刻印の拓本をとる作業

【写真４】基礎に据えられていた胴木と杭

石垣の記録と分析

千代田区では、現在、現地調査で得られた測量結果や図面・拓本などの整理と、木材や土壌の科学分析を行っています。

これらの整理分析では、石垣を構成する石材の由来に関する手がかりが得られるものと期待しています。石垣遺構の主な石材には、江戸城の他の石垣でも多く見られる伊豆半島産の安山岩が用いられていますが、石と石の間を埋める間詰石（まづめいし）には利根川水系で採取された円礫（えんれき）（角の取れた石）が含まれるなど、他と異なる特徴があることがわかってきました。また、石垣につけられた刻印（こくいん）は約 20 種類が確認されており【写真３】、他の石垣と比較検討することで、どの大名がどんな場面でかかわったのかを明らかにできると考えています。同様に、基礎に用いられていた胴木や杭などについても、使われていた木材の樹種の同定などを進めています【写真４】。

現在、私たちが目にすることができる江戸城の石垣の多くは、近世から現代に至るまで繰り返し修理されて今日に至ったもので、築城時のオリジナルを残す石垣はきわめて貴重です。どのような材料を使ってどのような手順で作っていたのか、引き続き分析を進めていきます。

（学芸員　相場峻）

コラム　江戸城を築城した場所はどんな場所？

徳川氏が江戸城の普請を始めた頃の江戸城周辺がどんな場所だったのかという問題は、長い間、謎の１つとして研究者の関心を集めてきました。今回の１号石垣遺構の発掘調査では、この謎に関連する興味深い特徴を見つけることができました。

右の写真は石垣遺構正面の掘り方を真横からみたものです。写真中央に縦に引いた線より右側の自然堆積層は一見すると固まった粘土質の土ですが、よく見ると帯状の痕跡がたくさん入りこんでいることがわかります。この痕跡は貝が活動した跡で、この場所が海に近い水辺であった可能性を示しています。つまり、当時の堀は大手門内にまで入り込んでいた自然の入り江を利用してつくったということが、ここから見えてくるのです。

１号石垣遺構の前面で見つかった掘り方

拡大写真

日比谷ミュージアムガイド

令和３年度テーマ展② 千代田区出土の中国磁器

期 間 令和３年10月19日（火）～12月19日（日）（予定）
※休館日：11月15日（月）

場 所 日比谷図書文化館　常設展Ｖ室（入場無料）

令和３年度後半のテーマ展では、千代田区内で出土した中国産の磁器を展示します。建て替え工事の多い千代田区では発掘調査の機会も少なくありません。発掘調査ではそこにあった建物や池、石垣など構造物の痕跡のほかにも、瓦や当時の人々が使っていた生活用具も出土します。これまで区では発掘成果を報告する特別展・企画展を催してきましたが、全出土品の中では数少ない、稀少な中国陶磁のみを取り上げる機会はあまりありませんでした。そこで本展示では、千代田区の遺跡から出土した中国磁器を、３つの種類別に紹介します。

中国と陶磁器について

陶磁器というと瀬戸や有田といった日本の産地を思い浮かべる人も多いと思います。日本でも縄文時代以来様々なやきものが作られてきましたが、その多くは中国から渡ってきた技術がもとになっています。中国は高い陶磁器生産技術を持っており、そこで作られた品々は古くから日本でも珍重されてきました。国内での磁器生産が可能になった17世紀以降も中国産の磁器は一定の需要を保ち、日本に輸入され続けました。

青磁

土器や陶器が約1200度未満の焼成温度で焼かれているのに対し、それ以上の温度で焼かれ、素地（やきものの土）と釉薬のガラス化が進んだ施釉のやきものを磁器といいます※。中国では、紀元前1500年頃には堅く焼きしまった施釉陶器が作られており、これを原始磁器や原始青磁とも呼んでいます。【図１】の龍泉窯産の青磁大盤（皿）は、日本では室町時代や戦国時代の武家におけるステータス・シンボルの１つでした。江戸時代においても大名屋敷の発掘調査では、こういった大盤が出土することがあります。

青花（染付）

素焼きした素地に酸化コバルトを主成分とした顔料で絵付けをし、透明釉をかけて焼いたものが一般にいう青花です。日本ではその顔料を呉須、青花のことを染付と呼びます。白地に藍色が鮮やかなこの様式が14世紀頃に景徳鎮窯によって確立されると、瞬く間に大人気となりました。

【図２】は明朝末期に生産された、日本で芙蓉手と呼ばれる青花の大盤です。芙蓉手は特に欧州で人気を博し大量に輸出されました。また今回展示

【図１】飯田町遺跡出土青磁大盤

【図２】有楽町一丁目遺跡出土青花大盤（芙蓉手）

有楽町一丁目遺跡発掘風景

出土時の【図2】青花大盤の一部と【図3】五彩揃皿の一部

するものは五彩ではありますが、【図3】は日本で祥瑞（手）と呼ばれるタイプのものです。祥瑞は青花のうち、細かい幾何学的な吉祥文様が多用されていたり、釉の欠けなどが見られたりするものを指します。【図3】の皿は29枚が出土し、武家の儀礼や饗応の席で用いられたと考えられます。

五彩（色絵）

高温で焼成した磁器に上絵具で絵付けを施し、もう一度低温の窯で焼いて色を定着させた磁器のことで、多色を用いることから五彩と呼ばれます。日本では色絵、特に赤を基調とするものは赤絵と呼ばれます。【図4】は日本では呉州赤絵と呼ばれる盤です。呉州は中国南部という意味で、福建省に位置した漳州窯で焼かれました。自由闊達な絵付けが特徴の呉州赤絵は日本で好まれ、長く珍重されました。

※ 土器、陶器、炻器、磁器といったやきものの区分けは国によって異なります。ここでは日本の区分を用います。なお中国では釉薬のかかっていないやきものを陶器、かかっているものを瓷器と呼びます。

展示では、これらが発掘された3遺跡についてや、上記以外の種類の中国産の磁器も紹介します。中国で作られ日本に渡ってきた中国磁器をぜひご覧ください。

（学芸員　岩城晴美）

【図3】有楽町一丁目遺跡出土五彩揃皿（色絵祥瑞手）

【図4】飯田町遺跡出土五彩大盤（呉州赤絵）

Chiyoda コレクション

写真が捉えた馬車鉄道～東京市街地の鉄道のはじまり～

千代田区所蔵資料の中にある『明治二十一年撮影全東京展望写真帖』は、建設中であった神田駿河台のニコライ堂の足場から全方位を撮影した写真13枚を掲載している資料です。明治21年（1888）という、江戸から東京へと移り変わる時代のまちの様子を捉えた写真として、これまでも数多くの人に注目されてきました。今回はその中から、のちに東京市街地における交通網発展の基礎となった馬車鉄道の姿を捉えた写真に注目し、紹介していきます。

万世橋を通った馬車鉄道

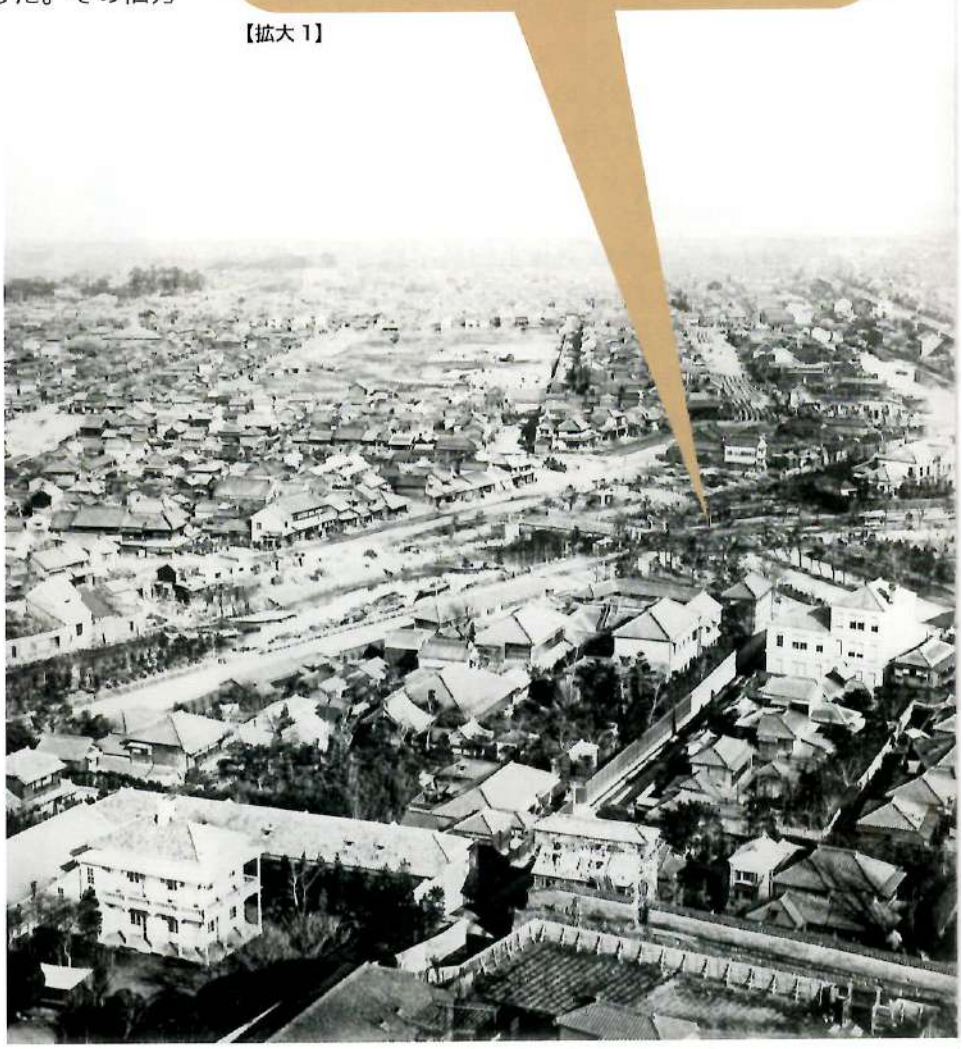
レール上を走って人や物を運ぶ鉄道といえば、電車や、時代を遡れば蒸気機関車などが連想されますが、今日のように電車が東京中を網羅する以前、レール上を馬車が走っていた時期がありました。この鉄道のことを馬車鉄道といいます。

馬車鉄道は、旧万世橋方向を写した2枚の写真の中に捉えられています（【写真1、2】）。【写真1】に写る当時の万世橋は現在の万世橋より上流、現在の昌平橋寄りの位置に架かっており、石造のアーチ二連橋で「眼鏡橋」の愛称で親しまれていました。その旧万世橋の南橋端に注目すると、須田町方向から伸びる馬車鉄道の軌道が確認できます（【拡大1】）。反対に、【写真2】では須田町方向に続く軌道を捉えており、その上を走る馬車の姿も見えます（【拡大2】）。新橋を出発し、日本橋・本町を経由して万世橋に至るこのルートはさらに上野・浅草へと続いていました。

馬車鉄道は木造の車両を2頭の馬が牽引しました。主にイギリスから輸入した車両を用い、定員は24名と28名の2種類で、乗務員は馭者1名と車掌1名でした。また、【写真2】に写る車両は年間を通して使用された一般的なものですが、夏にはオープンカータイプの車両も運行していました。

万世橋と馬車鉄道の軌道

【拡大1】



【写真1】東方　万世橋秋葉原を越えて浅草鳥越方面を望む

参考文献

・東京都公文書館編『都市紀要33 東京馬車鉄道』（東京都、1989年）

・東京都交通局編『東京都交通局100年史』（東京都交通局、2012年）

馬車鉄道の歴史

東京馬車鉄道会社によって馬車鉄道が敷設されたのは明治15年（1882）のことです。この敷設には、東京市街地の陸運拡張の目的がありました。当時、蒸気機関などの鉄道は東京市街地を通っておらず、乗合馬車や人力車が人や物の交通手段として用いられていました。馬車鉄道は、従来の馬車よりも馬力を要さないためにより多くの人や物を運べる点※、また蒸気機関車の3分の1の費用で鉄路を敷設できる点において画期的なものでした。そこで東京市街地における大量輸送の早期実現を目指して導入が進められました。運行を開始した馬車鉄道は盛況で、東京市街地の交通の新たな顔として活躍しました。

一方で、運行による道路破壊やその修繕の遅れ、馬の糞尿被害などの課題も発生しました。これらの問題などから、明治33年（1900）に動力を電気に変更することになり、明治36年（1903）に東京市街地の馬車鉄道は完全にその姿を消してしまいました。その後は、馬車鉄道からバトンを引き継いだ路面電車によって、東京市街地の交通網拡大が進められることになります。

明治期は、日本が富国強兵を掲げて新しい事物を積極的に取り入れた時代で、鉄道もそのひとつです。明治15年に敷設された馬車鉄道は、東京市街地における鉄道網整備の第一歩ともいうべき存在でした。しかし、わずか20年という短い運行期間であったため、馬車鉄道の姿を捉えた写真は限られています。本資料は、貴重な馬車鉄道の姿を捉えた資料のひとつでもあります。

※たとえば乗合馬車の場合、明治15年施行の馬車取締規則によると、馬1頭に対し乗客は6名が限度と定められていました。したがって2頭立ての乗合馬車と比較すると、馬車鉄道はおよそ2倍の輸送力を有しました。

（文化財資料調査員　鷹野真子）

馬車の様子

【拡大2】

【写真2】東南東　連雀町を越えて濱町両国方面を望む

文化財事務室通信

令和３年度千代田区の文化財講座のご案内

史跡巡り

講座名	江戸城登城ウォーク	講師名	相場　峻（区学芸員）

開催日時	定員	会場	応募締切日	参加料
11月3日（水・祝） 9:30～12:00	20名	千代田区内 （皇居外苑・皇居東御苑）	10月8日（金） 必着	500円

内容　将軍の城であり、近世最大の城郭であった江戸城跡（皇居外苑・皇居東御苑）を歩きます。最新の発掘調査成果なども写真や図面で紹介します。

講座名	江戸城外堀ウォーク	講師名	濱口　皓（区学芸員）

開催日時	定員	会場	応募締切日	参加料
11月23日（火・祝） 9:30～12:00	20名	千代田区内 （江戸城外堀）	10月22日（金） 必着	500円

内容　近世最大の城郭の一画である江戸城外堀（四ツ谷駅～文化庁間）を歩きます。最新の発掘調査成果なども写真や図面で紹介します。

文化財講座

講座名	神田和泉町の移り変わり ―伊勢津藩藤堂家上屋敷の発掘調査の成果から―	講師名	梅田　優歩（学習院大学史料館PD共同研究員）

開催日時	定員	会場	応募締切日	参加料
10月30日（土） 14:30～16:00	20名	和泉橋区民館　洋室B・C	10月8日（金） 必着	500円

内容　神田和泉町の屋敷地や町並み等の移り変わりを、近世～近代の史料や地図、伊勢津藩藤堂家上屋敷の発掘調査の成果をもとに紹介します。

講座名	浮世絵づくりの舞台裏 ―神田の商家・紀伊国屋三谷家を事例に―	講師名	洲脇　朝佳（区学芸員）

開催日時	定員	会場	応募締切日	参加料
11月27日（土） 14:30～16:00	20名	千代田区立日比谷図書文化館 4階 スタジオプラス（小ホール）	10月22日（金） 必着	500円

内容　知られざる浮世絵制作の舞台裏を、神田の商家・紀伊国屋三谷家と同家伝来のコレクションを事例に、版元やスポンサーに焦点をあてながら紹介します。

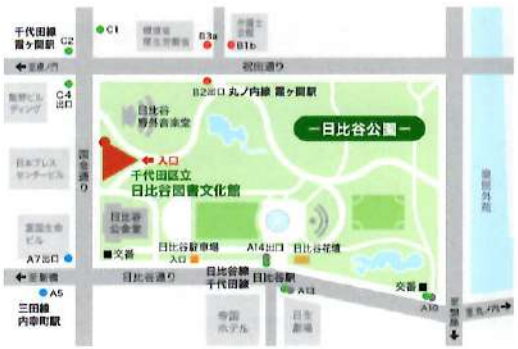
応募方法

往復ハガキまたはＥメールに①～⑤の項目を記入し、文化財事務室まで、お送りください（本ページ右下、編集・発行欄に住所など宛先記載）。

①講座名　②氏名（ふりがな）　③年齢
④郵便番号・住所　⑤電話番号

※応募締切日が講座ごとに違っています。応募の際にはご注意ください。
※区内在住者優先。応募者多数の場合、抽選となります。

昨年度の江戸城登城ウォークの様子



都営地下鉄 ●三田線―「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 ―「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場　当施設に駐車場はありません。

開館時間　月～金　10時～22時
土　10時～19時
日・祝　10時～17時
文化財事務室　月～金　10時～18時

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
※緊急事態宣言が解除されるまで、平日の開館時間は10時～20時までとなります。
最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日　毎月第3月曜日

文化財ニュース　第25号　（3,000部）

発行日　令和３年９月30日

編集・発行　千代田区立日比谷図書文化館　文化財事務室
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP:http://edo-chiyoda.jp
e-mail:bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

印刷　日本印刷株式会社